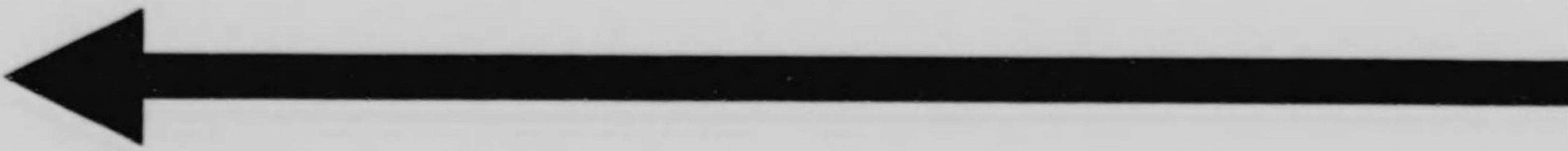


9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



373

394

X
複写

田國巡狩の動機と其感想

文學博士

福來友吉先生著

四國巡拜の動機と其の感想

373-394

四國巡拜の動機と其の感想

文學博士 福來友吉

大阪市駐在布教師なる岩橋三溪師と同行して四國まわりをして來ました。まわりとは申すものゝ、此度は岩橋師の大阪市内巡教用務の御都合と、私の東京に於ける教育事務やら、その他の研究用件やらの爲とで、二人とも八十八ヶ所全巡拜の心願を得果たさず、僅に讃岐の國二十三ヶ所の靈場を巡禮しただけで、一先づ

相連れて歸途に就くことゝ致しましたのです。三月三十日に高松市高野山別院より御禮しはじめ、四月五日に根香爐寺までまわり、それで讃岐一ヶ國の巡拜を了へ

正 6
大 州
内 交

たさいふやうな始末で、その日数はといへば僅に一週日、これを八十八ヶ所全部巡拜の日數に比すれば、實に六分の一にも足りない程の事ではありませうが、しかし私は、その短い日數の間において、豫期以上の宗教的經驗を得、豫想以上のありがたき事どもを見聞させていただいた譯なので、日數は短かくとも、私の頭腦にキザミこめられたる「四國靈場巡拜のありがたさ」といふ事と、「弘法大師の御慈悲の廣大さ」といふ事とは、永く久しく滅却し得られるものではないのです。今月は大師御誕生の芽出たき月に相當してゐることですから、それを御祝ひ申上ぐる心持ちで四國巡拜の動機と其の感想なる一文を六大新報社に投じ、兼ねて之れを以て、此度私が受けたる大師様の恩徳の萬分の一の報謝に供したいと思ふのであります。

感想を叙するに先だち、四國巡拜の事を實行するに至りたる動機について一言して置かねばなりません。

私は宇宙はそも／＼何物であるかと云ふ事と、宇宙と共に存在する人間てふものは如何なる價値を有するものであるかと云ふ事と、外に之れと關聯して、宇宙と其の生命——特に人間と其の生命——てふ事について、年や／＼久しく種々に研究してゐる者ですが、その研究の結果やら、それに関する私の意見やらは、事の重大なるだけソレだけ其の説明が大層となる譯でして、コゝには之れを言ふの餘暇がないこととして、たゞ此の誌上でチヨト一言してみたいと思ふことは「信仰の必然」てふ事に就いてあります。信仰は必然の事實です、必要であるからなど、云ふやうな事

とは違ひます。すなはち人間は必然に何者かを拜むものです、拜まずには得をられないものであるのです。どれほど不信心な人でも、一生の間には何か一つ拜みたくなつたり、少々づゝなりとも拜ひでみたり、或は拜まねばならぬ動機に觸れたりするものです。ツマリ拜むといふ事は、人間一般の通有性でして、しかも此れが吾々御互の本徳なのです。その本徳を發揮せむがために、拜みつゝ其の日その日を缺目なく送つてゆくと云ふ事は、誠に善い事として人間として、此世に生まれいでたる以上、ドウしても斯くあらねばならず、また斯くあるべく生まれ出でゝゐる譯なのです。すでに「拜む」といふ事が人間通有の本徳で、しかも此れが必然の道理であるとしてみると、拜むだからとて羞かしい事でもなく、反つて拜まない方が恥辱とな

つてゆくといふの理が解かる筈です。すでに其の理が解かつたとして、さて此世の中で拜む人々が多いか、拜まない人々が多いかといふ事を調べてみると、遺憾なことには、拜まない人々の方が割合に多いといふやうな勘定となつてゐるのです。それは畢竟、その人々の迷ひに因ることとして、別にこれと云ふ程の理由もない譯ですが、しかしドチラかといふと誠に御氣の毒な話して、斯ゝる人々は、折角、人間と生まれて来てゐながら、人間の本徳を發揮することを知らない愚者であると、ここに私は断定して置きたいのです。「私は」ではない、古佛古聖たちが皆すでに其の通りに仰せ下されてゐるのです。そこで私は思ひます、人間はその通有性として、いづれ何者かを拜まずには居られないのですからして、一日もはやく、その拜む所

の本尊を定め、これを信仰し、これを禮拜して、おのづから正しき心を養ひ、其の正しき心を以て萬事を扱ふてゆくといふ風にせなければなるまい、と。無論、に謂ふ「正しき心」とは、信心を指して云ふ事にして、世間普通人の所謂「正直なる心がけ」など、いふやうな分かりきつた事柄とは、全然その義理を異にしてゐる譯なのです。つまり人間は、必然の事實として、謂はゆる信心の本徳をみがき、その本徳によりて……すなはち信仰によりて……日常の行動萬端を律してゆくやうにせずばなるまい、と。而して其の之れを爲すには、拜む事を以て第一とせなければならぬ。しかも其の拜むといふ事たるや、人間世界での道徳中、最も勝れたる道徳であつて、差がしい行爲でも何でも無い。大凡このやうな意見の下に、私は先づ宇宙

の根本、生命の源泉なる毘盧遮那如來を信仰して之れを拜み、同時に其の如來と二而不二の關係を有したまへる弘法大師を崇めて自家信心の本尊と定め、みづからも信すれば人にも之れを信じさせたしと、熱心に希望してゐる者なので、その平生に信仰してゐる宗旨はといへば、無論、真言宗、その絶対に歸依してゐる佛様はと聞はるれば、申すまでもなく、今いふ所の「如來と不二なる弘法大師様」であります、と直下に御答へ申して憚らないのです。

元來、人間の生命は、宇宙の生命と其の壽命を同じうするものであつて、畢竟するところ、永遠不滅、常住不變、いつまでも死なないものであるからして、従つて吾々人間は、その自然的傾向として、知らず識らずの間に、かの生命の源泉を探り

之れを求め、之れを追ひ、之れを慕ひ、之れを慕ひなどして……ツマリ拜むたり、
祈つたりなどして……結局、その生命の本源地にかへり行かうとして、モガキ焦つ
てゐるといふやうな風がある。是れは人間一般の通有性です、此の通有性がやがて
吾々に、「人間はドウしても何者かを拜まなければならぬものである」といふの證
據を示して呉れてゐる譯で、とりも直さず是れが、信仰の必然を物語つてゐる、と
いふ理詰になるのであります。信仰はドウしても必然です、必要であるから信仰す
るのちや杯といふやうなウスツペラなものではありませんぬ。

西洋諸國その他の方面に於ける事は、しばらく措いて之れを論ぜずとして、我が
日本國の方ではといふと、學者は宗教を信仰しないものである、といふ風に一般の

相場が略々定まつてゐるやうです。尤も中には信仰してゐる人々もあらうかなれど
も、その人数はといへば、極めて少なくて、そして眞面目なる信心家に乏しいとい
ふのは、誤りのなき事實であります。そのクセ多くの學者間には、ロク／＼宗教の
眞理が解つてゐないにも拘はらず、之れに對して彼れ是れと批評を加へて見たり、
或は一神教ちやの、汎神論ちやの、佛耶二教の比較説ちやの、何ちやの教ちやのと
云つて、自分一流の著書や翻譯物なんかを公にしてみたりなどして、それで餘程の
學者らしいやうな顔をしてゐる人々が、随分深山にあるやうです。彼等は好むで、
宇宙はドウの、實在はドウの、神はドウの、佛はドウの、何はドウの、かはドウの
と云つて、いかにも高尚らしい議論や説明やを試みてはゐますけれども、それはた

だ議論や説明にのみ止まるだけの事であつて、宗教そのものゝ實際とは餘りに關係のないことですから駄目なのです。餘りにどころか、一向に關係のない、一種別方面の道樂仕事に過ぎない程のことであるからして、トンと役には立たないものと見てよろしいのです。宗教そのものゝ生命は信仰です、信仰のなき宗教的行爲は、命のなき人形のやうなもので、死物同様です。死物なる人形が、生きて働かない如く、議論や、説明や、研究や、それやこれやの道樂仕事ばかりで、事の足るものぢやと思ふてゐるやうな、謂はゆる宗教學者たちの日常の行爲が、決して世の中を活かし得るものではないのです。我邦の學者中、その宗教に直接關係のある者と否とを問はず、一般に人格が低くて、到底、社會を指導するに足る程の威力のなき所以のも

のは、畢竟、信仰てふ事を輕々視して、空しき議論にばかり走りすぎてゐるからのことです。道理で彼等の行動には、眞實、宗教を信する人々に見るやうな、慕はしげな點が少しもない、その平生の容貌からして何となう冷淡さうである。容貌すでに此くの如く冷淡さうであるからして、心の底も亦おのづから冷かなるべきは申すまでもなき事です。彼等は、死せる書物の中にある命題を云々する事については割合に熱心ではあるが、生きてゐる人間に對しては甚しく冷淡である。堂々として立派に人生觀なんかを説いてゐるけれども、社會多數人の生活難などに對しては、馬耳東風のやうな態度で知らぬ顔をしてゐる。彼等は、眞理なるものをば扱ふに、常に書齋の中か、研究室の内かに於てのみしてゐる。そして實際社會と眞理とは、殆

ど没交渉であるかの如くに相場を定めてしまふてゐる。私は斯ゝる學者たちの態度を眺めて、いつも甚しう不審に思ふてゐるのです。何故に彼等は、議論や説明だけの事で満足してゐるのであらう乎、何故に彼等は、命題にばかり捕へられてゐるものであらう乎、何故に彼等は、斯んな事ぐらゐで真理が解つたと思ふてゐるのであらう乎。私は思ひます、真理はそのやうに世間を離れたるものではなく、世間と共に生きて働いてゐるものでなければならぬ、と。つまり真理は、活きた生命そのものでなければならぬ筈なのです。他語以て之を言へば、真理は活物です、智慧です、力です、如來です。不生不滅、不増不減、無始無終、永遠不死的の不可思議なる本體です。そして一切萬有に行きわたつてゐる絶大無對の「靈」そのものです。吾

人の斯うして生きてゐるスガタそれ自身が、取りもなほさず真理の自發自現です。故に真理は、書齋の中や、研究室の内にもみえるものではないのです、命題などを説明してゐる所にもみ存在してゐるものではないのです。機械なんかに関することをば、書物の中の説明だけで學ぼうと致しましても、到底それは叶はない如く、真理に對しても其の通りのこと、たゞジープとして讀んでばかりゐたり、考へてばかりゐたからとて、その實際が分かるものではないのです。解りきつた事を云ふやうですが、真理は其の實際に觸れてみなければ、決して會得のできるものではありません。要するところ、真理は、ひとへに信仰といふ實修實行の門から這入つて見ることが必要で、之れをば研究門や、説明門の方から窺ひてみたからとて、その真相

が分かるものではないのです。真理は信仰を基礎となし、その信仰によりて、宇宙の大靈すなはち如來の實在を認め得たる時において、始めて會得せられるものです。至心に信仰して如來を拜したてまつるとき、吾人の肉體の中に宿れる小さな心が、不思議にも無限に大きく開き來りて、謂はゆる宇宙の大靈そのものと、ピツシヤリと一致し、また融通することが出来る。然うなると吾人は、もはや單純なる説明の仕方や、命題の取扱ひぐらゐに満足し得ないで、進んで宇宙の大靈の營む永遠的生命そのもの、仲間入りをして、知らず識らずの間に向上的精神が養はれ、日常の生活も自然に清淨化されて來る。其處に人間てふもの、價値があり、其處に宗教信者てふもの、生命があり、其處に學者てふもの、威嚴がある筈です。私は思ひます、

人間はドウしても宇宙の大靈を信じなければなるまい。そして之れを信ずると同時に、拜むことを實行せなければなるまい。ツマナリ信仰によりて活きた生活を營まなければなるまい。しかも斯くすることが人間世界に於ける最高の道徳であつて、佛の業といふ事も、畢竟これに外ならぬことであらう。と。此れが私の平生の主張であります。同時にその信仰であるのです。

宇宙そのまゝをば、如來と信じて之れを拜み、その信仰によりて、永遠不滅的に生きてゆくと云ふの一事は、固より確かなる學術的根據を有するのみならず、此事たるや、第一、人間の精神をして自然に向上せしめ、その生命をして知らず識らず永久的に開發せしむる上に於て、實に必要なことである。其の學術的根據につい

ての議論は、他日に譲ることとして、今はたい、その如來を信する事が、精神の向上、生命の開發について、最も必要なものであると云ふ一點だけを、簡單に述べてみたいと思ひます。

精神の向上、生命の開發について、最も必要なりとすべきは、如來を信仰するの一事であります。その事たるや、第一に、個人的には安心立命する上において必要であり。第二に、社會的には人心を統一する上において必要である。といふ、大凡此の二點の必要から生じてゐるのです。

第一に「個人的には安心立命する上に於て必要である」といふ一點より言はむに、凡そ人間は、その未だ精神の向上してゐない、至つて野蠻愚昧なる時代には、單に

物質的快樂だけを以て、無上のものとして之れに満足してゐるものであるが、次第々々に其の精神が發達して來るといふと、自然に精神的幸福を要求し初めるもので、その場合には、もはや物質界の欲望ぐらゐには必ずしも眼を懸けてゐないものである。人生七十、古來稀なり、八十、九十は兎にも角にも、百歳、百有餘歳と生きながらへてゐる人々とは、滅多にあるものでない。たまく／＼然ういふ長命な人々があるとする、それは世間で珍らし、とせられてゐる程である。斯くて吾々御互は精々五十年か六十年乃至七八十年の間だけ呼吸して居つて、遂には死んでしまふのである。死んでしまふ後は、全體ドウなり行くことであらう乎、唯それ死んでしまふたダケの事であらうか、ツマリ何等の意義もなく、忽然として生まれ來り、そ

して何等の目的もなく、忽然として死んでゆくだけのものであらうか、それだけでは何やら物足りないやうな心持ちがする。然り人生は、決して其のやうな無意義なものでもあらう筈はないのです。若しも人生は、そのやうな果敢ないものであるとするならば、吾々人間の一生は「さすらひ」である、流浪である。野蠻愚昧當時の人民ならば兎にも角にも、文明開化時代の人間であると言はれてゐる吾々御互にはそのやうな無意味な解釋だけでは、到底、満足することの出来るものではない。獨り斯ういふ場合に、吾々の精神に充分なる満足を與へて呉れる所のものとしては、信仰すなはち禮拜てふ實修實行の一事あるのみである。元來、吾々は、宇宙の大靈なる毘盧遮那如來を信仰し、これを禮拜することによりて、永遠不滅の生命てふ事を

悟り、その生命と無窮に一致して……すなはち如來と同化して……即身に不生不滅の妙用をあらはし「我れも亦これ佛なり」と、いふ程までの悟域に達して、最もたふとき、且、たのしき一生を過ごすべき大責任を負ふてゐる所のものである。斯様に悟つてみると、人生はモハヤ「さすらい」でもなければ、流浪でもなく、無意義でもなければ、無趣味でもないものとなしものど轉化し來りて、こゝに始めて安心も出來、立命もできることとなりて、この有爲轉變の世の中をば、却つて愉快に、しかも最も意義のあるものとして、之れを活かしてゆくことが出来るのであります。是れが私の「如來を信する事は、個人的には安心立命する上に於て必要である」と云ふ所以です。

第二に「社會的には人心を統一する上に於て必要である」といふ一事より論じてみむに、總じて現代の人々は、人は人、我れは我れといふやうな、利己一方の薄情者となりをはり、其の思想も甚しく險惡となりゆきて、殆ど統一する所を失ふてゐるやうです。之れを個人主義者などに言はせてみると。人間の個性發揮といふ事を前提にして、斯くの如く思想の別々になつて行くのは、固より當然の事であつて、かの人心をば同じ範圍に統一してしまふなど、云ふが如きは、到底でき得べき仕事ではなからうと、斯様に論ずることもあらうが、併しそれは唯、人心てふもの、半面を觀たるだけの話して、議論の根據が甚だ薄弱であるのです。凡そ人の思想なり、思想の源なる生命なりは、分化てふ事と、統一てふ事との、相即不離の關係により

て進歩しゆくものであるから、よしや人間の思想が、如何ほど個人的に分化すればとて、その分化に即して、其處に統一の意義が行はれなければならない筈のものでして、統一を離れて個人的に生きむとするが如き考へは、アマリ皮相的觀察から出てきた謬論の影響であつて、その結果は、人間をして自滅の淵に陥らしむるより外はないものである。論よりも證據です、かの世界戦亂後の今日から考へてみましても、我が日本國民は、一日もはやく、堅固なる一致團結すなはち統一のある眞の國家的生活を營まねばならないやうに迫まれてゐるではありませんか。現に近ごろの流行語となつてゐるデモクラシーてふ事でも、その邊の必要から起こつて來たことで、必ずしも此れが、思想の統一を無視する個人主義から湧いて出たものとも思は

れない。又必ずしも此れが、或る人々の解釋してゐるやうな、所謂民主政體でふ事のみを一點張りに説きまはるものでもないらしい。要する所は、人類相互の障壁を除き、官僚主義や階級沙汰の善からの弊風を一掃して、平民的に、そして自治的に一致結合せる團體をつくり、上下平等に生活らしい生活を営まうとする要求がデモクラシーそのものゝ主張なので、結局は統一を期待してゐる事に外ならぬのです。ところで、統一といふと、そも／＼如何なる統一の仕方であらうかと、豫ねてよりその一事をば怪むでゐた官僚側の人々は、此のデモクラシーの民主主義でふ一點について、かれこれと神経を悩まし、斯くては國民思想が支離滅裂となりて、國家の治安に害があるであらうからと云つて、それとなく訓令を發したり、規則を拵へな

として、是れも亦その方面に向つて人心を統一してかゝらうと試みてゐる。デモクラシー派の統一と、官僚派に謂ふところの統一と、畢竟その之れを統一せむとする所の方法に關しては、兩者たがひに意見を異にしてゐることでもあらうが、しかも人心やら思想やら、その他すべての點についての統一の必要てふ一事だけは、今や全世界にわたりて一般に感ぜられつゝある一大思潮なので、滔々として流れを衝いて來てゐるのです。そこで我が日本國民も、此際、精神的に一致結合して、眞に統一のある有機的團體をつくり、その生活をして、飽くまでも意義のあらしむるやうに各々努力せなければなるまい、と云ふ程それほど緊急なる時節と其の必要とに迫まられてゐるのです。ツマリ斯く致さねば、國民として安全に生存することが出來な

くなつてきたのです。ところで、その統一の方法たるや、現在の所謂デモクラシーのやうな信仰のない不徹底なものを以てしては、到底その目的を達し得られう筈もなく、さればとて、今ごろから官僚主義なんかを掃き出して、それを以て統一しやうと謀つてみたところで、是れ亦、本來が無信仰のカタマリであるからして、尙更ダメに歸し去るべきは申すまでもなき事です。然らば全體ドウしたら宜しからうぞとならば、既に一言二言せし如く、此はドウしても信仰てふ事を基礎となし、それに依りて精神的に統一を謀り、以て社會を利するにも信仰に依りて之れを利し、以て國家を益するにも信仰に依りて之れを益しつゝ、而して自他相互の幸福を増進しゆく事にあるので、此れを措いて他に求むるの方法は、よしや其の主張が如何ほど

立派さうに聞こへても、いづれ論ずるにも足りない、一時の流行的手段ぐらゐに過ぎないのであります。

人心統一の實現は、眞理を愛する信念一つに依りて見られます。すなはち信仰に依りて其の目的が成就されます。古來、その身を忘れて國家のために力を盡されたる、謂はゆる匪躬の節をば全うせられたる人々は、大抵は信仰家であつた筈である。信仰のある人にして、始めて社會國家のために匪躬の誠を盡くすことが出来ます。匪躬の誠を盡くし得る程の人にして、始めて統一のある自治生活の仲間に入ることが出来ます。信仰なく、従つて匪躬の眞心もなくして、いたづらにデモクラシーの主義を實現させやうとすると、その結果は却つて國家の不幸を醸し、人民の不利

を招きて、遂には救ふべからざる窮境に陥つてしまふこととなる。この一點だけは餘程よく心得て居らないといふと、動もすると危険思想に捕へられて、二進も三進も動かないやうになつてしまひます。諸外國の現状は申すまでもなき事、我が日本國の昨今は餘程複雑なる状態を示し來つてゐるのであるから、人心の統一てふ事は、一日もはやく之れを謀らねばならぬことになつてゐるのです。而して其の之れを統一する所の方法はと云へば、既に言ひし如く、信仰を以て第一と爲すべきは無論の事、しかも其の信仰をば、一時かぎりの方便などに利用するが如きことを爲さず、此れをして、幾久しく國家と共に存在せしむべく、各々その心積もりで事にこゝに從はなければならぬのであります。社會問題や勞働問題などを研究してみたり、種

々なる制度や規則やらを拵へてみたりする事も、一面たしかに必要なあることでして、必ずしもソレらを目して、駄目な業ぢやと申すのではありませぬが、併したゞ其の方面の仕事ばかりで、それでモウ萬全萬能ぢやと考へてゐるやうなのは、以ての外の心得ちがひであります。

明治維新以後、我が國民の大多數は、科學萬能主義のウヌツペラな教育に、その頭腦を荒らされてしまふて、甚しう雜駁なるものとなつてゐるのであるから、今にあたりて彼等の輕薄なる心を矯めなほして、その奥底に潜ひてゐる靈性を呼びだし結局、信仰を以て上下和合の實を擧げ、斯くして人心をば、健全なる國家的に統一すると云ふの一事は、苟も愛國てふことに心ある者の、當に爲さねばならぬ仕事で

して、而も此れは、目下にとりて最も必要な一條項となつてゐるのです。

信仰は能く人心を和げ、また能く人心を調へます、信仰は能く個人を利し、また能く社會を益して其の紊亂を防ぎます。要するところ、人心の統一は、信仰を外に於ては到底その功を奏し得べからずです。是れが私の「宗教を信する事は社會的には人心を統一する上に於て必要である」といふ所以であります。

以上述べたる所の理由と、外に私は、年や、久しく研究しつゝある、私一派の心理學の立場と、かれこれの接續關係よりして、ドウしても信仰生活に入らなければならぬ境遇にすゝみ、幸にして少々ばかりづゝ佛教信仰を續けをりたるころ、縁ありて弘法大師の宗旨に其の信念を注ぐことを得、自然その宗の事を取調べてゐる

間に、いよくますます大師様の面影が喜はしくなり、フイ其の事の詳細を、私の最も敬愛しつゝある岩盤三溪師に話したるところ、そは不思議の佛縁とこそ聞ふべけれど、大に喜びくれたる上、かねて私の志願しをりたる四國まわりの一事をば、同師みづから案内者となりて之れを實行させ、前に申した七日間の巡拜中に、私をして、大師様の御恩徳の實に廣大であるといふ事と、その御慈悲の誠に深重であるといふ事とを、一層ふかく味はしめたのである。而して私をして、四國まわりの事、如何にたふとく、亦ありがたき業であるかと云ふことを感せしめ、兼ねて私の、日ごろ研究しつゝある心理學的理論の方面より之れを考へても、此の事の實行の如何に必要にして且つ有益であるかと云ふことを知らしめたのである。是れが私の

四國を巡拜するに至つた原因と、その動機とでありまして、これ以外、何等の好奇
心もなければ、又、何等のワザとらしい態度とでもなかつた譯です。

四國巡拜の動機について一言するに當たり、信仰の必然てふ事やら、人間はドウ
しても信仰がなくては叶はぬものであると云ふ事やら、それやこれやの事どもを述
べましたから、讀者諸君は私の大師様に對する信仰と、その平生に懐抱しをれる宗
教意見を、略々御了解くだされたであらうと信じます。これよりは更に、七日間
の遍路修行中に得たる大なる御利益と、外に、修行中かれこれと感じたる事どもを
略記して諸君に見ゆること、致しませう。

それは大凡、左の通りの事として、別段これと云ふて書きたてる程のことでもな

からうが、しかし私自身にとりては、これまでに會て経験せしことのなき、最もあ
りがたき宗教的ビルグワメーサであつたのですから、おのづから其の感想なきこと
能はずです。且、私は、大師御誕生の聖日にあたり、何か別の文章でも作りて、之
れを御祝ひ申さう代りに、敢てこの平凡らしき四國遍路談を以てした譯で、その重
中はいふと、たゞ報恩の一事に供したいばかりのことであるのです。そのお積も
りで御讀みを願ひます。

便宜にしたがひ、感想を分ちて左の三つと致して置きます。

一、慈悲心の發起と其の實行。

二、同情心の發現と之れに伴ふ所の感謝的行動

三、宗教の極致と靈覺の實證

第一に先づ、慈悲心の發起と其の實行なる一項目について所感を述べることに致しませう。

禮拜中に受けたる第一の御利益は、心の底から慈悲を行じ得た事であります。眞實に佛ごゝろとなりて、惱める人々に接し得た事であります。いさゝかの私心もなく、ひたすらに憐れなる「お遍路さん」や、その他の人々に接してゆくことの出来た事であります。これは私のやうな徳のうすき人間に取りては、實に無上の賜物であつた譯で、曾てこれまでに實行せしことのなき、宗教的慈悲親切の一事をば、小さいながらも、我れより進んで之れをさせていたゞいた、と云ふ其のありがたき

加減は、實に何に譬へむやうもなき程で、これこそ眞實の御利益にてありしことよと、巡拜を終はりし日などには、殊更に其の一點に心附くところありて、獨り大に感謝したやうな次第であります。

大窪寺から長尾寺の方へ引きかへす途中に、二十一二歳とも思はるゝ若き女のお遍路さんが、いかにも行惱むたやうな姿で、麥田の畔に腰うち掛けつゝ、その母親と共に休むでゐました。慰めてあげませうぞよと思ふて、岩橋師と二人で彼女に話しかけてみると、哀れにも脊髄病者でして、身體全部の運動が不自由となり、一日に僅々一里か一里半か、精々二里ぐらいしか歩まれないのですとの事でした。その難澁なる病身をもつて、八十八ヶ所、二百八十八里の道程をば修行して廻はるナン

て、世には何といふ可愛相な者のあることであらう、私は彼女の病氣そのものよりも、泣いて大師様の御袖にすがりつき、ひたすらに其の御慈悲を乞ひつゝ、ニジリあるきのやうな歩みを續けてゐるアノいちらしさに對して、言ふべからざる人生の悲哀を感じ、思はず知らず同情の涙が流れて、ドウしても其れを堰きとめ得られなかつたのです。岩橋師も亦、しきりに落涙されつゝ、彼女の脊中に珠數をあてがひ一心に眞言を唱へながら御加持をしてお遣りなされてゐた。私はその傍で「これより萬事をふりすて、彼女を脊中に負ひ、八十八箇所全部を共に巡拜してあげやうかナア」など、考へつゝ、岩橋師の音聲につれて、熱心に眞言を唱へて進せました。無論、彼女の雨眼からは、涙は瀧の如くに落ちてゐたのです。そして最初の願はき

の聲も、程なく泣聲と變じきたりて、實に哀れを極めたのでした。彼女をば連れて共に巡禮してやつてゐた其の母なる人は、彼女の泣聲よりも、一倍つよき聲を出して、ヨ、と其處に泣きくづられたのです。しかも其の母人は、彼女の生んだ娘であらうかとも思はるゝ、今年やうく三四歳ぐらいの、まだ願是もなき孫をば、己が脊中にのせやりつゝ、この困難なる遍路修行をば共にしてやつてゐるのでしたが、私共は其のありさまを眺めて、一層、氣の毒の情に堪へやらず、一面において先づ此の哀れなる母親の心をば、如何にして慰めやるべきかと、更に其の事のために、言はず語らず、吾々ふたりの者が、心を勞しあふたのでした。

巡拜中、右の脊腫病者の哀れなる境遇に類したやうな人々が數々ありまして、そ

の人々に逢ふたびごとに、私も岩橋師も非常に泣かされたのです。たゞ私は、それらの哀れなる人々に接して、親しく其の心を慰めてあげましたソノ時々には、たゞひそれが暫時の間の事にもせよ、自身の心が、眞實佛様の慈悲心と同化してをつたと云ふことを、コゝに表白して偽らない者であります。

四國巡拜の一事は、私をして、生まれてより曾て起こさなかつた慈悲を、眞面目に發起させて呉れました。そしてソレをば直ちに實行の上に現はすやうに導いて呉れました、大師様に對して感謝せなければなりません。

二、同情心の發現と之に伴ふ所の感謝的行動

哀れなる人々を見て、同情の心が發現して來ると同時に、自分の一身の、斯くは

幸福の地位に置かれつゝある事に對して、衷心から感謝の情が湧いて出るやうになる。感謝の情が湧けば、おのづから其の行動が改まつて、すべての點が謝恩的にやさしうなつて來る。四國方面では、大師様を信する人々の慈善行爲として、善根宿とか、御接待とか申す美はしい風儀が盛んに行はれてゐますが、此の風習の原因の一つは、哀れなる人々を見て、氣の毒の情に堪へざるがまゝ、我れを忘れて其の人々を救済するに至つたことゝ、二つには、その哀れなる人々の状態に引きくらべて自分の境遇の幸福なるをば感謝するの餘り、大師様へ御禮の意味にて之れを實行するに至りましたのと、三つには、此の慈善行爲を實行すると、大師様がお喜びなされて、爲めに現世の惡事災難を拂ひのけて下されるに違ひないと云ふの確信と、或

は先祖や新亡者の命日にあたりて、その追善供養を営む折りにか、又は其の佛事供養を爲すの代りとしてかに、此の布施善根を實行するといふと、たいへんな功德利益になりまするぞよ、といふ佛教的自然教訓の下に、斯くは美はしき風俗を爲すに至つたものと見えますが、要するところ此れは、同情心の發現が其の原因となりて之れに伴ふに感謝の一念を以てして、斯くは美はしき人道的行爲を實現するに至つたものに外ならぬので、いづれはと云ふと、これもヤハリ大師様の御高德と、その最も勝れたる威化力の然らしむる所であるのです。ですから、大師様を外にして、斯かゝる美德美風の行はれてゐる原因を探らうと致しましても、少なくとも四國の土地に於ては、恐らくソレは叶ひますまいと思ひます。大師様の御威化の力も、亦

實に偉大なるものではありませぬか。

志度寺から長尾寺まで行く途中に、大川郡、造田村、是弘といふ在所がある。長尾寺までモウ十三丁といふ所でしたが、三月三十日の午後四時ごろに其處を通行してゐると、六十歳あまりの一人の婆アさんが路傍に立つてゐて、私等兩人に向ひ、善根宿をしてあげますから御泊まり下さいと、最も物やさしう申して呉れたのです。四國遍路は、如何なる場合にも人の親切を無にしてはならない、と云ふ自然の定めになつてゐるのですが、しかし其の日は、高松市、高野山別院の主任者なる尾油泰純師の御取計らひで、長尾寺まで到着して、其處で演説をしながら一泊させて戴くといふ、特別なる手順が運ばれてゐましたので、彼の婆アさんの折角の厚意をも受

くることを得せず、「他日アナタの御宅で御厄介になる事もありませうから」と挨拶して、その夜は豫定されたる通り、長尾寺まで行きて宿泊し、その次の夜は大窪寺にて御宿を借りうけ、翌朝すなはち四月一日に該寺を出發して、途中、長尾寺を通過し、その日の夕方すぎまでに高松市まで戻らうとする其の次手、一昨日の造田村なる婆アさんの親切を想ひうかべ、それを感謝しがてらに、右の長尾寺附近から其處までの道程、往復二十六丁の廻り路をば、何等の勞苦とも考へず、一向きに彼女を訪問して進せる事と致したのです。

往つてみれば彼女の住宅は、普通の農家として、私等兩人の往訪をば歓迎て之れを迎へ、嬉しさの餘りにてやありけむ、涙を流しながら「サア、何か一つ御食べな

さらぬか……米をあげませうか、豆に致しませうか」など、云つて、最も質朴なる言動の内に、心の底からの親切を盡くして呉れるのでした。彼の婆アさんは、今年最愛の娘に先きだゝれて悲しさ言はむ方もなく、セメテは亡き娘の菩提の爲にもかなと思ひて、私等に善根宿を呉れやうとしたと云ふ理由が分かりましたので、自然その心の切なさに同情しやりて、早速、佛前に向ひて回向の經文を讀むであげたのです。すると彼女は、娘の位牌をば其の前に持ち出だして、私等が佛を念じつゝ、ありし間、聲をあげてシキリに泣いてをられたのです。併し泣いては居られましたが最後には非常に満足したやうな顔付をして、幾度となく感謝の辭を洩らされたのでありました。

私はアノ時に、宗教を信する御互が、哀れなる人々の身の上に同情して、その心を慰めて進せると云ふ事の、如何に人情的に偉大なる力を持てるものであるか、と云ふことを實地に経験し得たのです。そして今更ながらに。宗教そのものゝ威力に感心したのです。

私は、此の一話の中において、眞實の同情心は、宗教を信することを得たる時に遺憾なく發現し來るものである、と云ふ事と、同情する者も同情される者も、宗教を信仰いたしてこそ御互の間に感謝の念の美はしく生じ來るなれ、その之れに反する以上には、決して眞實の感謝的行動を取り得らるゝものでない、と云ふ事との二つの意味を含有させて置きたいと思ふのであります。同情心が發現して、それが實

行の上に、現はされたる時には、自他ともに自然と感謝の念が生じ來りて、その行動がドウしても宗教的に働くものです。これは必然の道理でして決して、間違ひのない事であります。一

三、宗教の極致と靈覺の實證

宗教の極致は靈覺てふ事にあるのです。靈覺など、申すと、新らしい言葉のやうに感ぜらるゝかは知りませぬが、ツマリこれは、宇宙そのまゝをば毘盧遮那如來なりと覺了して、しかも其の如來と自己そのものとは、元來、差別のなきものにして二而不二の關係を有するものなりといふ所以の理を悟り、長へに其の大靈と一致して迷ふことなく、謂はゆる永遠の生命即ち佛の境界をば、現世現身のまゝにて實證

することをいふのでして、大師様の宗旨にいふ所の即身成佛てふ言葉の代用に外ならぬのです。靈覺は何人でも出來得る筈です。理具成佛と申して、すべて人間には本來、佛となり得るの道理が、チャンと其の身に具へられてゐるのです。たゞ吾々は、餘りに迷ひすぎてゐるが爲に、容易に靈覺スナハチ成佛の實を證することが出來ないまでです。ところで吾々人間が、若しも或る宗派の人々の云ふやうに、此身このまゝにては成佛の實を證することが出來ないものであるとしてみると、人間てふものゝ一生は實にツマラナイもので、現在この生命てふ事においても、意義もなければ價值もなく、不徹底なること此上もなき有様となりて、折角の一代を醉生夢死の姿で過ごしてしまはねばならない事となりをはります。私は年や、久しく此事

について考へて居つた者で、如何にもして靈覺の實を證して見むものをも、淺學ながらにも、其の方面の研究に熱心してをりましたが、元來此事たるや、直接、信仰に關することとして、かの研究や議論なんかの間接仕事を以てしては、到底その目的を達し得られう筈もなく、これはドウしても實地の修行でなくては叶ふまじと、自身でも考へたり、他人からも教へられたりなどして、ドウにかして一日もはやく其の修行に取りかゝりたいものぢやがと、日夜に希望してをつた所へ、岩橋三溪師と宗教や哲學に關する事どもを話しあふことゝなり、その因縁によりて、しかも幸にも同師と行を同じうして、先づ四國の御靈場へと遍路修行に出掛ける事と致したのです。固より僅々七日間の修行ぐらゐで、靈覺についての所得如何を云々するが

如きは、甚しい生意氣沙汰でして、先輩諸君に對しては無論の事、一般信者に向つても、自然、失禮にあたる譯でもありませんが、しかし私は、大師様の御導きに依り、幸にして、今いふ靈覺の、初歩でも申すべき或る程度の信仰要路にまで進ませて戴きましたものですから、嬉しさの餘り、に之れを發表して、そして次手ながら一人でも二人でも大師信者の増加するやうにと希望し且つ勸誘するだけの事にして、決して他意のある譯ではありませんのです。

私は、今回の巡拜中、大師様の御蔭で、ジエームス教授の所謂「不可見の實在」てふものを實地に感見させて戴きました。それは「肉眼には見えないけれども、たふとき活きたる靈なるものが實在してゐて、それが私と、始終、平等的に相對して

呉れてゐる」といふ最もありがたき宗教的經驗なのです。あの經驗は、善通寺の御堂で、大師様の震前に跪きて、専心に祈りつりありたる時に著しく得られ、次ぎには、彌谷寺の岩窟に這入りて、大師様のまだ御幼少なる時の御事と、その御修行の如何に獻身的であらせられたか、といふ其の御事とを、いとも懐かしう偲びたてまつりつゝありし間に再び得られ、最後には、根香爐寺の大師堂で、一心になりて拜むでをりました時に得られたものでして、前後三回とも、其の信仰状態は殆ど同じく御蔭で、いつも平靜で且つ安穩で、別して大師様の御冥助によりて、佛様と自分の無差別的關係、及び其の關係の裏に存する、一種いふべからざるありがたさを知ることを得、斯くして今いふ所の「不可見の實在」そのものをば、ハッキリと見させ

て戴くことが出来たのです。

これより、前白峰寺の納経場で、七十歳にも近からうかと思はるゝ哀れさうな女の遍路者に、私どもの貰ひためてゐた米や錢をは残らず施してあげましたのです。

然うすると其の老婆は、泣いて感謝してをりましたが、やがて大師様と私共に對して、御禮のかはりにとありて、落涙しながら御詠歌を唱へはじめ、爲めに私共をして、思はず眼を濕さしめたのでした。殊に其の音聲の、誠にたふとく聞こえた事と、その歌の節の、何となうありがたさうであつた事とは、恐らく何時のいつまでも忘るゝことの出来ざる程で、自然、私は其の場に於て一種いふべからざる靈感に打たれながら、たいへんに佛たふとく覺えましたのです。ところで、それから該

寺を立ちいで、やがて根香爐寺まで到着してみると、かのお婆さんも、亦其處へ着いてをられて、私等と再び出逢ひたることを非常に喜び、又も佛前で、先刻のやうな御詠歌を誦ひだされたのでしたが、その時の音聲は如何にといふに、前に聞かされたのよりも更にら明かして、それに此度は、岩橋師が、彼のお婆アさんの飾りのなき信心と、それやこれやに同情を寄せて進せて、共に其の歌をうたふて御遣りなされたものですから、其處に一倍二倍のありがた味を加へ來り、暫時が間は實に何とも言ひ得ない程の光景を呈したのでした。私は其の時に、その御詠歌を唱ふるありがたき音聲に聞き惚れながら、一方大師様の御木像をば、ジーツツとして拜むのであるといふと、不思議にも其の御像が動くかの如くに感せられて、たふとさ言はむ

やうもなく、斯くて私をして、其の場に於て、所謂「不可見の實在」なるものと自身との關係、及び斯かる場合に活動する宇宙の靈の微妙さを、一層ふかく會得せしめたのです。而して是れが、讃岐二十三ヶ靈場巡拜の最終日の事にして、殊に御蔭で七日間の巡禮旅行をば、最も有益に、且、有意義に、そして萬事好都合の間に終了させて戴いて、これよりはモウたい芽出たう歸途に就きさへすれば宜しい事ぞといふ、最後の安心日でありましたものですから、一倍ありがたく亦うれしく、その御體として、幾度か大師様の御前に低頭して、やがて其の寺を辭し、かのお婆さんとも別かれて、靜かに山路を下りながら、岩橋師と共に、毘盧遮那如來と宇宙との不二なる所以の理を語りあひ、西洋の宗教界にも亦、殆ど之れと同一なる學說を主

張する者のある由を承はりなどして、更に幾倍かの快感に驅られつゝ、眼を轉じて遙かに前方を望むといふと、瀬戸内海の美はしき景色が、吾人を歓迎してゐるかのやうに、そして宇宙間の神秘をさゝやきて、いよ／＼ますます／＼信仰をすゝめて呉れてゐるかのやうに、しかも寂然として最も靜かに私等兩人の前に現はれてゐるのでした。心の所爲であると言はゞいへ、その時に眺めの天地たる光景は、平生のソレとは全然その趣きを異にしてをつて、其の間、實に何とも言ひ得ない程のたふさ、とありがたさを吾人に默示して呉れてゐたのです。私は確に信じます、あの時の天地一切が、全く寂黙無言の姿で吾人に接して呉れてゐたのは、如來と不二にて坐す弘法大師様が不思議の妙用を垂れたまひて、吾々をして、今後一層あつき信心を養

はしめむが爲めの御方便であつたことに違ひなからう、と。新しく信じあふぎつゝ、
且、非常に感謝しつゝ、芽出たく今回の巡拜を了へたのでした。

宗教の極致は靈覺に在り、靈覺の極意は信仰に在り、信仰の奥義は之れを實行の
上に求めなければ、決して悟了のできるものではありません。これが私の、今回、
四國にまゐりて實地に修行してみました理由なのです。

「慈悲心の發起と其の實行」「同情心の發現と之れに伴ふ感謝的行動」「宗教の極
致と靈覺の實證」以上の三つは、宗教を信仰する者としては、是非とも心得て置か
ねばならないことであらうと信じます。私は僅々一週間の巡禮實行中に、初發心な
がらにも、以上三者を實地に體驗して、仕合はせよく其の奥義の入口にまで達し得

たることを、此上もなき幸福として喜んでをる者であります。その後、私は巡拜中
の事どもを追想して、沈思に耽らぬ日としては一日もありません。そして友人らに對
して、四國まわりのありがたき事を説き、君らもアンマリ學者ぶつた顔ばかりして
をらずに、少しは謙遜らしい態度を取り、先づ四國へでも參詣して、實際、信仰の
氣分に觸れ自然そのやうなヘンテコな頭腦をば、大師様の御蔭で通常なものにして
戴いて來てはドウぢや、など、云つて、勸めたり教へたりしてゐるやうな次第です。
いづれ私は、モウ一度、岩橋師に御同行を願ふて、八十八ヶ所全部巡拜の心願を果
たさうと思ふてゐるのですから、その時は其の時の事として、更に感想を記して、
諸君の一覽に供しやうかども考へてゐます。

弘法大師御齋生の芽出たき月に當たり、それを御祝ひ申上げむ心持にて「四國巡拜の動機と其の感想」なる一文を草し、不充分ながらも之れを以て祝辭に代へ、兼ねて報恩謝徳の一分の淨業に供した次第であります。

終はりにのぞみ、次手にて失禮ながら、今回の巡拜中、私共をば宿泊させて、その上いろ／＼と親切にして下されたる高野山別院様や、長尾寺様や、大窪寺様や、善通寺様や、観音寺様や、清道寺様や、その他の寺々、又は在家の人々にして、種々御厚意をお寄せ下されたる御方へ、幾重にも御禮を申上ぐる次第であります。

(をばり)

大正八年十一月一日印刷
大正八年十月五日發行 (非賣品)

四國巡拜の
動機と其の
感想
奥附

編輯兼
發行者
鈴木久次郎
高松市外磨屋町十六番地

印刷人
田村太郎
高松市南鍛冶屋町十八番地

印刷所
大日本印刷株式會社
高松市南鍛冶屋町十八番地

高松市築地町

發行所

高野山讚岐別院

373
394

終